# アフター・アフターストーリー

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アフター・アフターストーリー

【Ｎコード】
Ｎ５２７１ＢＡ

【作者名】
うな

【あらすじ】
旅人たちのつかの間の休息。そこは夢にまで見た安住の地だった。

**（前書き）**

こちらは前日譚があります。先に『アフターストーリー』をご覧になって下さい。

その後の話を少しだけしよう。

それは、遠い昔話。私がまだ少女だった頃の物語だ。

☆　☆　☆　☆　☆

「痛むか、リィン」
「ううん、平気。アベルこそ、大丈夫？」
「さてな。正直なところ、どれだけ保つか分からん。いざとなったら村人は捨て置く。いいな」
「でもっ、それじゃリーネと赤ちゃんが！」
「分かっているっ！　だが、俺もお前もここで死ぬわけにはいかぬだろう！」
「ひうっ！　でも、でもぉ……」
雨、だった。どうしようもなく、雨だった。
全てか空から降る暴力に飲み込まれようとしている。
私は必死に抵抗した。自分の言うことを聞かない雨に苛立ちながら、村へ流れ込もうとする水の暴力を必死に止めようと試みた。
「お願い……みんな、早く逃げて……！」
まだ魔力は残っている。村の皆が逃げるぐらいの時間を稼ぐ程度わけないはずだ。

北大陸の東端、アララトという村がある。小さな小さな、本当に取るに足らない様な小さな村。
そこでは独自の信仰が芽生えていた。北南両大陸で信仰される戎（じゅ）除（うじ）教とは教えを異にする、土着の信仰。

ひょんなことから教皇庁の異端審問官に追われることになった私とアベルは、帝都のある南大陸から散々逃げまわり……教皇庁の手の入っていないアララト村に暫く隠れることにした。特に理由はない。それまで訪れた村と同じように長居するつもりはなく、早急に立ち去るつもりだった。

しかし、意外な……本当に以外なことに、アララト村の村人たちは私達を歓迎してくれた。普通、このような小さな村にとっては旅人など害悪でしかない。閉じられ、完成されたコミュニティでは外部からの闖入者は綻びを生む要因にしかならない。

実際、異端審問官から逃げまわる最中に訪れた村は大抵がそうだった。“そういう場所”を選んでいるのだから当然なのだろうけど、命を奪われそうになったことも何度かある。

だから、アララト村の歓迎ムードは逆に私たちを不安にさせた。アベルに至っては「腹など減っていない」という苦しい言い訳をしてわざわざ開いてくれた宴に出された食べ物に一切手を付けなかった。

後から分かることなのだけど……実はこのアララト村、信仰している神が神と竜の間の子で、異種族の間に生まれた子を神聖視する風習があったのだ。つまり、エルフと人間との混血であるアベルと竜と人間の混血である私は、外部の者ではあったけれど信仰の対象だったわけだ。特に、竜の血の濃い私は村に滞在している間、申し訳ないほど良くしてもらった。何か贈り物をもらう度、何故かアベルは面白くなさそうな顔をしていた。

……今にして思えば、あの不貞腐れたような表情は彼には珍しい嫉妬の表れだったのだろう。

「わぁ、リーネさんだいぶお腹大きくなってきたね」

「ええ。もうすぐ生まれるだろうって、おばば様が。ほんと、リィン様とアベル様がいらしてからはいいことばかりで……村の皆はお二人のことお館様の生まれ変わりじゃないかって言ってるんですよ」

「二人が生まれ変わりって……お館様ってあれでしょ、竜と神の混血でこの村を作ったっていう。一人じゃないの？」
「さぁ……お館様は神様ですので、きっと私たちには理解できないようなことも簡単になさるんだと思います」
「そういうものなのかなぁ」
「きっと、そういうものなんですよ」
ある、春のことだった。
明日にはこの村を発とうと繰り返すうち、季節が二度巡り、リーネが懐妊した。
リーネは村長の娘で、好意的な村人の中でも特に私たちによくしてくれた。自然、私もアベルもよく話すようになり、この日もいつものように洗濯物をしながら話していた。
「でも、すごいよね。異種間での子供って中々できないのに、リーネさん一晩で孕んじゃうんだもん」
「ええ……それもこれもリィン様とアベル様のお陰で、」
「ああもう、それはいいから！　きっと相性が良かっただけだよ。リーネさんと……えと、ファブニルさんだっけ？」
「ええ……今、どこで何をしておられるか」
この前の年、村に一人の旅人が訪れた。彼は身分を偽装していたが、同族である私の目から見れば一目瞭然だった。水竜……それも、かなり高位の。
私たちの時とは違い、ファブニルをただの人間だと思っていた村人たちの態度は堅かった。それで私が助け舟を出し……彼に正体を明かさせた、というのがことの始まり。
一宿するだけ、という言葉の通り村で一晩を過ごした次の日には立ち去ったのだけど――その一晩のうちに、村で一番の器量よしのリーネと寝ていたというのだから相当手が早い。
そして奇跡的にリーネは懐妊、竜との子を宿したというので村は一時騒然となった。
ちなみにこの時、私とアベルは小さな喧嘩をしている。私が何気

なく言った「甲斐性なし」の一言がかなり頭に来たらしく、三日間口も聞いてくれなかった。そんな態度を取られれば反抗したくなるのも当たり前で、私はこれ見よがしにお隣さんのジルグという男の子のうちにお泊りに行った。別にジルグに気があったわけではないし、誓って何も疚しいことはしていないけれどお互い積もりに積もった不満を爆発させるには十分だった。お泊りの次の日、家に帰った私にアベルが「さくばんはおたのしみでしたね」とにこやかに言って「ジルグがロリコンでよかったな、幼児体型」と笑った。次の瞬間……家だったものとアベルが空高く吹き飛んでいったのはいい思い出だ。

閑話休題。

「そうそう。最近アベル様が山へ向かうのをよく見るんですけど、何をなさってるんですか」

麻の上着を干しながらリーネが聞いてくる。私は、アベルのパンツを丹念に洗いながら、首を傾げた。

「うーん……たぶん、山の方調べに行ってるんじゃないかな。この前の開墾で地盤が緩くなってるってのは聞いたでしょ？　それの対応をしてるんだと思う」

「対応？」

「大雨が降ると山が崩れて村が土砂で埋まっちゃうかもしれないから、それの予防策を考えてるんだと思う。最近、“異様は豪雨”が多発してるって聞くしね」

「そうですか。村の為に……。アベル様には何かお礼をしなければなりませんね」

「お礼？」

「例えば……私と一晩を共にする、とか？」

「ぶっ！　なっ、何を言ってるのリーネ！　ダメだよ、アベルは私のご主人様なんだから！」

「そうですね。“ご主人様”ですね」
「なっ、なな、なんなのその言い方っ！　ダメったらダメ！　いくらリーネでもアベルはあげないから！」
「ふふふ……リィン様、可愛い」
「弄ばれた！？」

楽しかった。本当に。ずっと……ずっとこんな日々が続けばいいと思った。
けど、それは私の／アベルの我侭だった。
私たち訪れてからちょうど三年目だったその日、アララト村は異端審問による『大洪水』によって跡形もなく流された。
魔力が尽きるまで頑張った。「捨て置くと言った」アベルも逃げないで倒れるまで洪水を防ぎ続けた。
けど……生き残ったのは私とアベルと、ファブニルの血を引く出産直後のリーネの赤ちゃんだけだった。
時間はあったはずだ。私とアベルがみんなが逃げるだけの時間は稼いだはずだ。けど……みんな逃げなかった。逃げられなかった。
リーネたちは、村と一緒に死ぬことを選んだのだ。

「私たちが……リィンがずっと村にいたから！　だからこんなことになったんだ！　全部全部、リィンのせいだ……！」
「それは違うぞ、リィン。“異様な豪雨”の話は聞いていただろう。これは教皇庁の粛清だ。異端審問にかけられたのは俺たちじゃない。このアララト村、そのものだ」
「なんで！？　なんでアベルはそんなに冷静でいられるの！　みんな死んだんだよ！　ジルグも！　リーネも！　みんなみんな死んだんだよ！　アベルは悲しくないの！？」
「聞け、リィン」
「なによ！？」

「今、みんな死んだと言ったな。なら……この子はどうなる。リーネが頑張って生んだこの子はどうなる」
「！？」
アベルは胸に抱いた子供を……そっと私に抱かせた。
女の子だ。小さくて、温かい。その温もりが、なんだかリーネと似ているような気がして……私が泣き出しそうになった時、それまで静かだった赤ちゃんが急に泣き声を上げた。
「うぇ……うぇぇぇぇ！」
「ぁ、な、泣かないで……泣かないで……」
私は怯えるように赤ちゃんを抱いた。どうにか泣きやんで欲しくて、村の奥さんたちがしていたみたいにあやしてみた。けど、赤ちゃんの泣き声はどんどん大きくなるばかりで一向に泣き止む気配がない。
「なんで……なんで泣きやんでくれないの……？　私がママじゃないから？　私が、リーネじゃないから？」
もう私まで泣き出しそうで。水没した村を前にどうしていいか分からない時が過ぎた。
アベルは何も言わない。アラト村の方をじっと眺めたまま、ただ立ち尽くしていた。
「アベル……」
その背中が遠くて、なんだかアベルまでどこかへ行ってしまいそうな気がして、その名前を呼んだ。彼は、小さくため息をついて、
「そろそろ行くぞ。まだ近くに異端審問官がいるだろうからな」
一度も私へ振り向かず歩き出した。
私は泣き叫ぶ赤ちゃんを抱いたままその後を追った。

☆　☆　☆　☆　☆

「それが、ぼくがうまれたときのおはなし？」

ベッドの中で娘が抱きついてくる。小さな背中を優しく撫でてやりながら、そうよ、と答える。
「じゃあ、ママはぼくのママじゃないの？　パパはぼくのパパじゃないの？」
無垢な瞳がじっと見つめてくる。ええ、と答えると、急にくしゃりと泣き顔になった。
「やだぁ……パパがパパじゃないのやだぁ……っ」
泣きじゃくって私の胸に抱きついてくる。その姿が……いつかの自分の重なって、少しおかしい。血のつながりなんてないのに、私とこの子は本当は親子でもなんでもないはずなのに、こんなにも似ている。
泣き虫で、甘えん坊で、パパのことが大好きで。
……というか、そこは普通『ママがママじゃないのいや』って言うところだと思うのだけど。
どこまでファザコンなんだろうと心の隅で思いながら、これも私の影響かと少し反省した。そして、今すぐこの子を泣き止ませる方法が同時に見つかる。
「もうすぐパパが帰ってくるから、聞いてみようね」
「パパ……？　かえってくるの？」
「ええ。だから、泣き止みなさい。あなたが泣いてるとパパ心配するでしょ？」
「……うんっ、わかった！」
あまりの変わり身の速さに苦笑しながら、自然と身嗜みを整えている自分に気づく。
あぁ……人のことといえないなぁ。
苦笑。いつまでも変らない自分の心に呆れ……不意にリーネの顔が浮かんだ。
ねぇ、リーネ。この子がお腹にいる時、あなたはこんな気持だったのかな？
どこに居るともしれない大好きな人をずっと、ずっと思ってたの

かな。
ね……リーネ。今、アベルとあなたの彼は戦ってるよ。一緒に、リーネたちみたいな人たちのために戦ってるよ。
お願い。あの人たちの為に祈ってあげて。無事を、勝利を。天国から祈ってあげて。
ね、リーネ。この子たちの未来の為に……。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5271ba/

アフター・アフターストーリー

2012年1月14日16時52分発行